

淀川水系流域委員会 第7回淀川部会検討会(2003.8.2開催)結果概要

03.8.22 庶務作成

開催日時：2003年8月2日(土) 13:30~17:20

場 所：京都市リサーチパーク 東地区1号館 4階 AV会議室

参加者数：委員15名、他部会委員2名

1 決定事項

- ・委員のみの部会検討会を8月22日(金)13:30~17:00に行う。
- ・部会としての意見とりまとめに向け、以前の検討会にて決めた班分けを一部統合し、以下の通り再編成した。また、各班の班長も決定した。

木津川、川上ダム関連：原田委員、大手委員、川上委員、谷田委員、榊屋委員

桂川関連：渡辺委員、塚本委員、田中委員、田村委員、和田委員

宇治川、瀬田川、天ヶ瀬ダム、大戸川ダム関連：

今本委員、田中(真)委員、寺田委員、榊屋委員、山本委員、和田委員、(寺川委員)

淀川本川関連：有馬委員、荻野委員、小竹委員、紀平委員、槇村委員、(細川委員)

注1) 下線の委員は班長

注2) ()内は6/7の部会検討会に他部会より参加された委員

- ・各班の班長は、8月18日(月)までにとりまとめ案を庶務へ提出する。
- ・次回の部会検討会(8/7)には河川管理者に出席を依頼する。

2 検討内容

委員会、他部会の状況報告および情報共有

庶務より、資料1「委員会および各部会の状況(提言とりまとめ以降)」をもとに、委員会及び他部会の活動状況等について報告が行われた。

説明資料(第2稿) 具体的な整備内容シートについての意見交換

部会長からの提案により、まだ議論できてない検討内容について、委員が重要と思う項目から議論を行った。主に「天ヶ瀬ダム、塔の島地区の一連の開発について」(1500m³/sの必要性とそのための整備の妥当性等)「維持流量」(流量に関する考え方等)「魚道」(連続性がどの程度回復できるのか、機能するための方策等)等について意見交換が行われた。

主な意見については、「3 主な意見」を参照。

次回部会の内容および今後の予定について

次回淀川部会検討会(8/7)では引き続き議論を行う。河川管理者にも出席頂き、今回提出頂いた資料や説明資料(第2稿)の内容に関して質問があればお答えしてもらおう。8月22日の検討会で「1 決定事項」で決定した4班のとりまとめ案をもとに議論を行い、8月26日の部会にて部会としての意見をとりまとめ、9月5日の委員会に提出する。

3 主な意見

説明資料(第2稿)の検討について

天ヶ瀬ダム、塔の島地区の一連の開発について

- ・天ヶ瀬ダムの改修や塔の島地区の掘削等の大規模工事をせずに、どこまで洪水調節ができるか検討したい。瀬田川洗堰を一部改修し放流能力を上げれば琵琶湖のコントロールがしやすくなり、急激な水位低下を起こさずにすむ等、環境に配慮した水位操作ができる。後期放流として何週間か1000m³/sもの水が流れることになるので堤防の強化は必要だが、後は既設の発電所等を活用する、バイパストンネルを掘る等で対応できないか。1500m³/s流れる状況は非常に稀であり、ハイウォーター(計画高水位)の考え方を見直し、また最悪の場合ダムの天端までを利用することを想定するなら、今の安全度を保ちつつ琵琶湖の水位-20cmを避けることは可能ではないか。これは利水にも大きく影響する問題である。

鹿跳峡谷を開削しない場合、堤防高を上げることが必要ではないか。

鹿跳までは河道内の掘削が既に半分行われており、計画にも書かれていて、これはしななければならないだろう。ただ、堤防高は上げずに、天ヶ瀬より下流の堤防を決壊しないよう一部強化する。下流については、川幅が広がるので、今話しているような洪水後の後期放流、あるいは洪水前の予備放流で1500m³/s流れても全く問題ない。下流が危険なのは宇治川、木津川、桂川の3川が洪水の時である。ちなみに、その際には瀬田川洗堰を全閉し、天ヶ瀬ダムで洪水調節を行っている。

塔の島地区では、1500m³/s流すには改修が必要ではないのか。

塔の島の平等院近くの堤防さえ補強すれば流れると思う。右岸側が多少溢れるかもしれないが、すぐ山なので問題ないのではないか。堤防強化が成功すれば、ハイウォーターレベルを超えて堤防の天端ぎりぎりまで水がきても大丈夫だと私は思う。そうなると、ほとんどのところは何もしなくて良くなる。

琵琶湖の水位が高い時、例えば春に大きな雨が降ると琵琶湖はもつのか。

既に琵琶湖総合開発が完了しているので、かなりの大雨でも琵琶湖の水位1m等にはならないだろう。

瀬田川洗堰で1200m³/s流すためにどのような改修が必要か。

洗堰そのものはさわらずに、現在つくられているバイパスを大きくしてそこにゲートをつけたらよいのではと考えている。

この30年程で水陸移行帯が減少したが、本来はそこでやるべき調整ではないか。

その案では、大戸川ダムによる洪水調節はどうなるのか。

大戸川が洪水の時は洗堰を閉め、大戸川の洪水を天ヶ瀬にそのまま流す。大戸川は大きな川ではないので、現在より危険になることはない。大戸川では土砂が要注意の問題である。

ダムの天端まで使用してもダムは大丈夫なのか。

そのためにゲートもある。日本のダムは壊れたことはなく、水没するほど雨が降ったとしてもダム本体が壊れることはない。一つの洪水が終わる間もなく次の洪水が来る

ような場合等、1000年確率のような雨に対しては、壊滅的な被害だけは避けようという以外に方法はない。

時間の経過を考慮するなら、破堤しなければたとえ1000年確率の洪水でも逃げることはできる。

この部分については主に意見を出された委員に素案をつくってもらい、部会委員で議論するようにしたい。(部会長)

- ・まず琵琶湖の夏期制限水位の検討があるべき。夏期制限水位を下げすぎていることが問題の根源となっていることを委員会として意見してから、天ヶ瀬の運用を考えるべきではないか。

今の洗堰の状態では、琵琶湖の水位が一度上がると引くまでに時間がかかるので、その間に問題が起こりやすく、周辺の市町村はむしろ今より制限水位を下げしてほしいと思っている。

今でも全開すれば一日に680万m³/sで3cm位下がる。

- ・琵琶湖総合開発により、周辺の環境整備も含めて洪水対策と利水を確保しようという巨大な計画は完了しており、次は淀川本川と周辺という段階に今あるので、今から洗堰や水位操作を一から見直しはできないのではないか。

天然湖沼をダムのように扱うというやり方が間違っているとは河川管理者も気づいているのではないか。何兆円かかろうと間違っているものはそう言わないと議論が進まない。

- ・水位が絶対量として下がるのが問題視されているが、水位が下がる速さが問題だという意見もある。また、放流量が多い時には琵琶湖大橋のところでエリが倒れたりもしている。

エリが流されてしまう問題は、水陸移行帯の回復により改善できるのではないか。

風による水面の変動を放流のせいと誤解している部分もあるのではないか。

- ・河川管理者は維持流量のなかに舟運や漁業維持のための流量も含めているが、環境のための維持流量とそれ以外を分けて考えるべきではないか。

生態系のためにどれだけの流量がいるのかを生態系の専門家がきちんと出すべきだろう。

量がいくらとは決められない。魚は少なければ少ないなりになんとかする。ただ、人工的に急激に水位を下げることはやめてほしいと、これまでも言っている。

河川形状との関係もあり、一概に量は言えない。

- ・最近では維持流量と言わず河川の正常な機能を保つための正常流量という言い方をしている。最低限の流量というのは、利水を満足させる流量を流せばそれで大丈夫なのではないか。環境を専門にする方の意見を聞いて、洪水がきてもうまく流れ、環境にもやさしい河道をつくるのは河川工学者の仕事だ。

魚道

- ・7/28の魚道の視察では、結局魚道が用を為していないことが分かった。堰には河川管理者以

外が管理しているものもあり、他の主体に対して物が言いにくい、という感じがあった。

- ・淀川大関はまさに机上で設計された魚道で、魚が上れるようになっていない。魚道は下流から直していくべき。
- ・魚道については、生物の知識がある人がチェックする等きちんとした設計をすることと、その後設計通り機能しているか、老朽化対策等管理することが必要だ。設計者が責任をもってフォローすべき。
- ・桂川等、今すぐ改良できるようなところもあった。水系全体を視察してそのようなところをもう一度検討し、できるところから改修していくべき。また、現地をみて実態の調査をして、新しい魚道を作る際の参考にすることが必要だ。
- ・管理者の意識が重要である。水利組合や農家等に魚道の重要性、必要性を教えるべき。

意識改革も必要だが、川の縦断方向の遮断の回復のためには、魚道だけでなく田んぼと用水路、川の落差をなくすような構造についても検討する必要がある。

- ・農地が減っているのに井堰だけが残っていることもある。堰がないことが一番なので、統廃合も視野に入れて検討してほしい。
- ・アユが上りやすいということが魚道の一つの基準にあるように思うが、甲殻類や水生昆虫等も含めて移動が可能な施設が理想である。
- ・魚道は必要ない（魚道をつくるだけではダメで、堰が無いのが本来の姿）と普段から言っている。

魚道が必要ないような構造物にできないのか。桂川には、岩を組み合わせたような堰もある。

- ・ダムに魚道は要らないのでは。上がっても行くところがないし、コストがかかりすぎる。
一概にダムに魚道が要らないとは言って欲しくない。河川にもよるが魚がダムより上流に上れることも大切である。
- ・堰やダムがあることで本当に生物が不連続になっているのか、きちんとデータを出すべき。
- ・連続性や魚道に関しては提言も言葉足らずである。魚道をつくっても連続性があまり回復できないなら作る意味がなく、堰やダムによる環境への影響に関してより厳しく考え、つくり方に問題があるならそこを意見すべき。この辺りに委員にも意見の相違がある。整備内容シートに書かれている部分、特に実施とされている部分について議論して意見書に盛り込むべき。（部会長）

以上

説明および発言内容は、随時変更する可能性があります。最新の結果概要はホームページに掲載しております。